

テラス

◎飯田市美術博物館ニュース◎

IIDA CITY MUSEUM NEWS "TERRACE" VOL.081
http://www.iida-museum.org/



2009 Vol. 081



テラス

飯田市美術博物館ニュース
2009 Vol. 081

●発行日/2009年1月10日 ●印刷/杉本印刷株式会社 ●発行所/飯田市美術博物館 〒395-0034 長野県飯田市追手町2-655-7 TEL 0265-22-8118 URL http://www.iida-museum.org/
© 2009 Iida City Museum ※本書を無断で複製・転載することを禁じます。

館長コラム

陶芸・絵付けのことなど

滝沢 具幸

先頃、ある美術館のコーナーに展示してある古い窯跡から発掘された陶磁器の破片を見た。皿や壺・水差しなどの欠片がガラスケースの中に所狭しと並べてあった。皿や鉢などの部分や取手、鉢底などの小さな断片には鮮やかな青や渋い鉄色で草や動物・人物や舟・干網などの文様が美しく描かれている。また志野や織部などの釉薬が部分的にかかった味わいの深いものも見られた。その小さな空間の中には、はるか昔の陶工の心情・想いが伝わってくる気がした。

人は昔から物を作り、その造形物によって自分の心を伝えてきた。そして美しい造形は時を越えて人に語りかけてくるものであると思った。

その後、近くの陶芸教室で陶器の絵付けをする機会があった。登り窯に空きがあるというので十数個程の皿や鉢に唐津風の文様

を描いた。誠に楽しいひとときであった。陶芸には粘土を捏ね、成形する楽しさや、絵付け、施釉など一連の作業行程の楽しさがある。菊練りからはじまり、素焼きした器に好みの釉薬を選び、あるいは絵付けをして窯に入れる。窯焚きに神経を使いながら、焼成し、作品を窯から取り出す。期待と不安の入りまじったその瞬間は楽しみ、また緊張する時でもある。

近頃はアマチュア陶芸も盛んである。自分なりの器やオブジェを手捻り、ひも作り、板作りや轆轤によって作る。作り手の好みや想いが直に陶土に伝わる。どこか本人に似た趣の形が生まれる。プロの陶芸家とはまた違った素朴な味わいのある作品が生まれる。絵付けの楽しみはまた、陶芸の魅力のひとつでもある。呉須(コバルト)の青や、鉄砂(酸化鉄)の弁柄色で描くことが多い。呉須絵は主に磁器に描くと美しい青色が浮かび上がる。鉄(赤茶)で描いた

「絵唐津」や「織部」には渋い味わいがある。自由闊達な伸び伸びした筆で描かれた茶碗や壺、香合、大皿など誠に素敵である。

素焼きした生地は水分を良く吸い込むので、筆の動きにまかせて一気に描く。描き味は画仙紙に描く水墨画の感触に良く似ている。筆の先と腹を使って気軽に描くと、良い結果が生まれる。絵付けの極意は筆が滯らないことである。筆に力を加えず、筆の重みだけで描くのである。

モチーフは芒や葦などの草花や松、柳、幾何学文様などがよく似合う。昔の名工のような作品でなくても、色々工夫を重ね自分らしい形や文様の描かれた自作の向付や鉢などに手料理を盛り、食卓で楽しむこともまた一興ではないかと思う。

● インフォメーション ①→④月 ●

●美術博物館		お問い合わせ: 0265-22-8118
◎企画展および特別陳列		
特別陳列 富草の化石 -近藤コレクションを中心に-	→ → 2/15(日)	
第9回 現代の創造展	2/24(水) → 3/15(日)	
特別陳列 桜	3/28(土) → 4/22(水)	
◎平常展示		
菱田春草をめぐる画題のイメージ 第6回「蓬萊」	1/9(金) → 2/15(日)	
華やぎのうつわ -青花と五彩-	→ → 2/15(日)	
飯田商家のみやび -井村コレクションと岩崎新太郎コレクション-	2/20(金) → 3/22(日)	
峡谷の花 -菱田春草と飯田の美術1-	3/28(土) → 4/22(水)	
◎プラネタリウム		
冬の番組「子ぎつねの白いてぶくろ」	→ → 3/1(日)	
春の番組「ぜんまいざむらい」	3/7(土) → 5/31(日)	
◎特別陳列「富草の化石」会場での化石レプリカ教室		
ムカシアオザメの歯化石をつくろう!	1/12(日) 10:00~	
カシノパンウニの化石をつくろう!	2/15(日) 10:00~	
◎自然講座		
ハナノキ湿地調査レポート 講師: はなのき友の会会員	1/17(土) 13:30~	
エベレスト街道の岩と水 講師: 金澤重敏氏(風越高校)	1/24(土) 13:30~	
温暖化が果樹生産者を直撃する! 講師: 果樹生産者の方	2/14(土) 13:30~	
伊那谷自然史発表会	3/22(日) 10:00~	
◎美博文化講座		
「心覚」にみる水戸浪士と飯田藩 講師: 鈴木博氏(清内路小学校校長・本館評議員)	1/25(日) 14:30~	
三遠南信の民俗と芸能(上映会・解説会)	2/1(日) 13:30~	
◎美博鑑賞の会(観覧料と参加料が必要です)		
菱田春草の「蓬萊山」	1/31(土) 17:30~	
景德鎮の古染付	2/14(土) 17:30~	
岩崎新太郎コレクション「平安勝景画冊」	3/7(土) 17:30~	
◎美術ワークショップ		
からだをいっぱいつかってお絵かきしよう 講師: 前沢知子氏(現代美術作家)	1/18(日) 10:00~	
◎子ども博物館くらぶ		
科学工作教室 ・FMラジオを作ろう	1/31(土) 9:30~	
宇宙をのぞこう -親子で学ぶ天文講座-		
・北極星を探る	2/14(土) 15:00~	
◎星空観察会		
冬のダイヤモンドとカノーパス	2/14(土) 18:30~	
◆臨時休館日	2/22(日)	
◎上郷考古博物館	お問い合わせ: 0265-53-3755	
◎館長講座		
石造五輪塔に秘められた由来 -仏教考古学から見た飯伊那地方の五輪塔- 講師: 岡田正彦(考古博物館館長)	1/31(土) 13:30~	
◎考古学講座		
下伊那の中世 講師: 鶴柄俊夫(同志社大学准教授)	3/1(日) 13:30~	
◎ぎやまん工房 -ガラス玉づくり-	1/18(日)・3/14(土)	
◎玉造部の会 -勾玉づくり-	2/15(日)・4/26(日)	
◆臨時休館日	3/3(水)	
◎追手町小学校 化石標本室	お問い合わせ: 美術博物館へ	
◎公開日	3/29(日) 10:00~16:00	

華やぎのうつわ — 青花と五彩 — ① 11/15(土) → 2/15(日)

家庭などで使われる食器の中には、白地に藍色の絵が描かれているタイプものが含まれていると思います。時に花柄がちりばめられていたり、幾何学紋様が施されていたり、山水画の描かれていたり、そのようなうつわを手にしたことがあるのではないのでしょうか。このような磁器の源流は、中国景德鎮にあります。中国の元時代(1271~1368)、景德鎮では、白磁に藍色の絵を施す青花という技法が生み出されました。コバルトによって描き出される絵は、美しい藍色の発色をみせて白地の下地に映え、清潔感のあるうつわが誕生しました。なによりもうつわに自由に意匠を描き出すことに成功したこの技法は、陶磁器の表現世界を大きく広げることになりました。

続く明時代(1368~1644)に入ると、景德鎮の窯は国で保護されて官窯となり、青花磁器の生産は一気に加速していきます。そして、景德鎮の青花は、宋から元時代に繁栄した龍泉窯の青磁に代わり、ヨーロッパや日本、中近東など全世界に輸出されていきました。また青花に平行して、藍色に加えて赤や緑、黄



①「青花花鳥図六角形盤」 17c中 本館蔵



①「五彩麒麟文盤」 17c前 本館蔵



①「青花獅子馬文瓢瓶」 16c中 本館蔵

色などで文様を描いた五彩と呼ばれる磁器も生産され、さらに作風にバラエティさが加わり華やぎをもたらしていきました。明代磁器が世界に与えた影響の大きさは、日本の伊万里やヨーロッパのマイセンなどが、景德鎮の磁器を手本にして、生み出されたことからもうかがえます。

平成11年に綿半野原総業株式会社から本館にご寄贈いただきました陶磁器の多くは、明時代

に焼成された青花と五彩から構成されています。日本で好まれた古染付や祥瑞など明代末期の青花を中心に、永楽や嘉靖、万暦時代の官窯の青花や五彩、さらに金襴手や呉州赤絵、南京赤絵などの個性的な五彩まで、中国明代時期の華やぎの世界を概観してご覧いただけます。(横村)

旧飯田藩士柳田家日記『心覚』の刊行 ②

日本民俗学の創始者柳田國男で知られる柳田家は、江戸詰の藩士として飯田領主堀侯に仕えたお宅ですが、その8代目つまり國男の3代前に、柳田東助為善(慶応元年揚介と改名)という人物がいました。幕府老中格まで異例の出世を遂げた10代堀親審とその子11代堀親義に、御側用人などとして仕えた優れた才覚の持ち主です。この為善は、安政6年(1859)に隠居謹慎を命じられ、飯田江戸町新建の藩士宅で生活するようになりました。そのとき記した日記が『心覚』です。これには飯田での日々の生活などが、驚くほど詳細に記録されています。

昭和20年にこれに目を通した柳田國男は、「社交ノ義理ガタサ 町人百姓トノ交際アリモヨクワカル」「単ニ家トメノ記念ノミナラス」「社会資料トメモ価値アリ」などと評し、活版にして知友皆に分けることを構想しました。そして、お茶の水大学名誉教授であり柳田國男館の建物を飯田市にご寄贈くださった長男の柳田為正先生が、

晩年、先祖の地飯田に心を寄せられながら精力的にその翻刻に取り組まれたのでした。飯田市美術博物館では、為正先生のお仕事を引き継ぐ形で、翻刻と刊行作業を進めてきましたが、平成16年に『旧飯田藩士柳田家日記「心覚」—

飯田町と藩士のくらしぶり』[-]、そしてこのたび『同書』[二]を公刊することができました。内容は、文久元年(1861)から為善の没した慶応2年(1866)までの6年間分です。

『心覚』は、飯田町の様子、藩士のくらしぶりなどを知ることができる希有な資料です。しかしそれだけにとどまらず、当時の飯田藩の動き、さらにはそれを取り巻く社会状況、幕末の激動する日本をもうかがい知ることができる、大変貴重な資料であることが次第に判明してきました。この資料は計り知れない可能性を秘めているのです。

今後、飯田市美術博物館では、この資料に学びながらさまざまな活動を展開していきたいと考えています。(桜井)

富草の化石 — 近藤コレクションを中心に — ③ 10/25(土) → 2/15(日)

およそ1800万年前の南信地域は、太平洋から続く海でした。この“富草の海”の地層(富草層群といいます)は、阿南町や泰阜村、飯田市千代、阿智村中野に分布しています。今回の展示

は、これらの地層から産出した多様な化石を紹介するものです。展示標本のほとんどは近藤コレクションです。

近藤コレクションとは、アマチュア化石研究者、近藤恭一氏(1911-1984)が収集した化石・鉱物・岩石です。故人の

遺志により1984年に下伊那教育会に寄贈され、現在飯田市美術博物館で管理しています。その多くは、4550点におよぶ化石標本で、富草層群から産出するほとんどの種類(有孔虫・サンゴ・貝類・エビやカニ類・ウニやヒトデ・サメや硬骨魚類・哺乳類・植物など)があります。標本はきれいに整形され、5mm大の小さなサメの歯にまで、一つ一つ整理番号(細かなものは1mm以下の

文字で)がつけられています。さらに産地や分類群ごとに、木箱に入れられています。

●珍しいチョウザメのウロコ化石 高級食材キャビアの親、チョウザメは、サメのようなかたちをした原始的な硬骨魚類です。日本産の化石の報告が

きわめて少ない種類ですが、阿南町の富草層群からは、その名の由来である蝶の羽に似た大きな厚いウロコが少なからず産出していることから、富草の化石の代表選手といえます。現生のチョウザメは主に大きな河川の淡水域から沿岸水域に生息する回遊魚です。当時、富草の海に流入する大河があったので

しょう。 ●化石レプリカ教室 富草の化石展に合わせ、美術博物館では今回初めて、地元富草産の化石のレプリカ作成体験行事を行っています。レプリカは、歯科用超硬石膏で作ります。(小泉)

※日程は、インフォメーション(4p)をご覧ください。



② チョウザメのウロコ(化石)



② 1mm大の細かな数字で標本に直接書かれた整理番号



②「富草の化石」 展示の様子



②レプリカ教室の様子



②旧飯田藩士柳田家日記「心覚」



②「心覚」 文久元年(1861)~慶応2年(1866) 本館蔵

表紙の作品 / 「青花牡丹文盤」 17c中 高 6.3cm 口径 35.0cm 本館蔵 (綿半野原コレクション)

中国元代(14世紀初頭)に景德鎮窯で成立した白磁に藍色の絵付けをする「青花」の技法は、次の明代(14世紀後半~17世紀中葉)に隆盛を極め、さまざまな製品が生み出された。景德鎮窯の青花のうち、明代の最末期を彩ったのが「祥瑞(ションズイ)」と呼ばれる藍色の発色の強い青花である。「祥瑞」は器面を幾何学文で埋めるなど華やかな作風を見せ、特に日本の茶の湯の世界で珍重された。